

こんな症状ありませんか？

分離不安 診断テスト

- ★あなたのわんちゃんはあなたの後をいつもついてまわる。
もしくは、
- ★あなたが家に戻ってくると過剰に喜んであなたを迎える。

YES

NO

- ★あなたのわんちゃんは、あなたの留守中に戸、床、家具などを噛んだり引っかいたりする。
もしくは、
- ★トイレ以外の場所で排泄する。
もしくは、
- ★過剰に吠える。

NO

- ★あなたのわんちゃんがかつて困った問題を起こしたことがある。
もしくは、
- ★よだれを垂らす時がある。
もしくは、
- ★皮膚や肢をいつもなめている。

YES

A

YES

B

NO

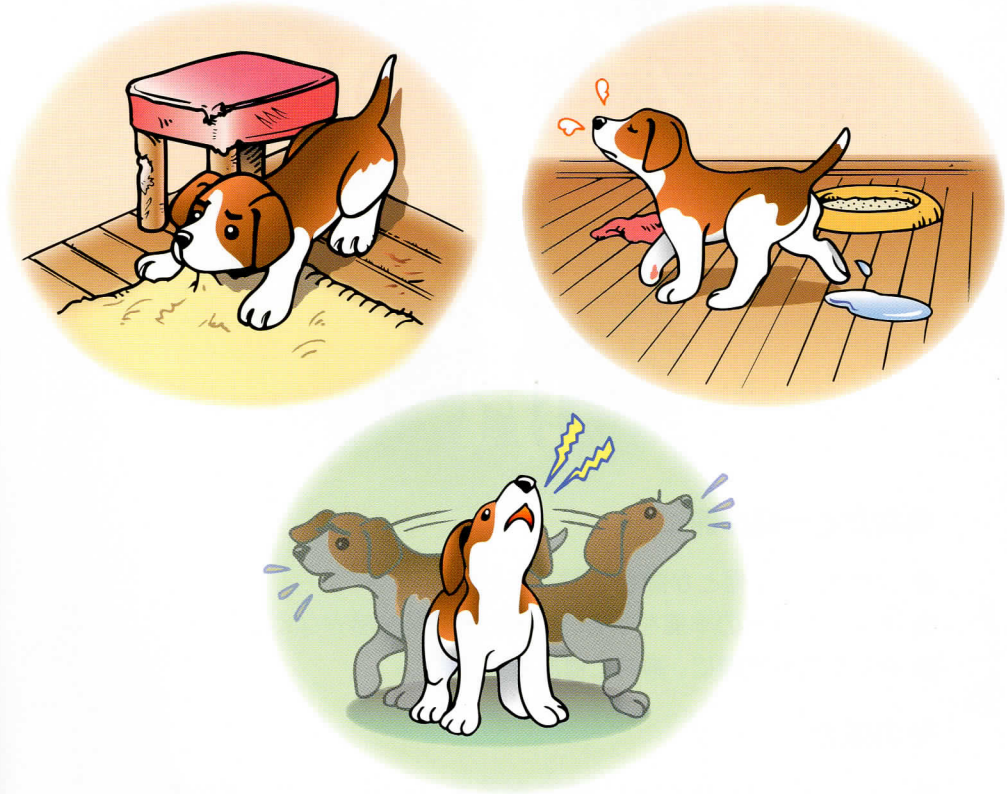
C

- A** 分離不安の可能性がります。獣医師へご相談下さい。
- B** もしかしたら他の病気が問題行動の原因かもしれません。獣医師へご相談下さい。
- C** 安心して下さい。あなたのわんちゃんはおりに留守番ができています。

...当院へお気軽にご相談ください...

あなたのわんちゃん、 ひとりきりの時 苦しんでいませんか？

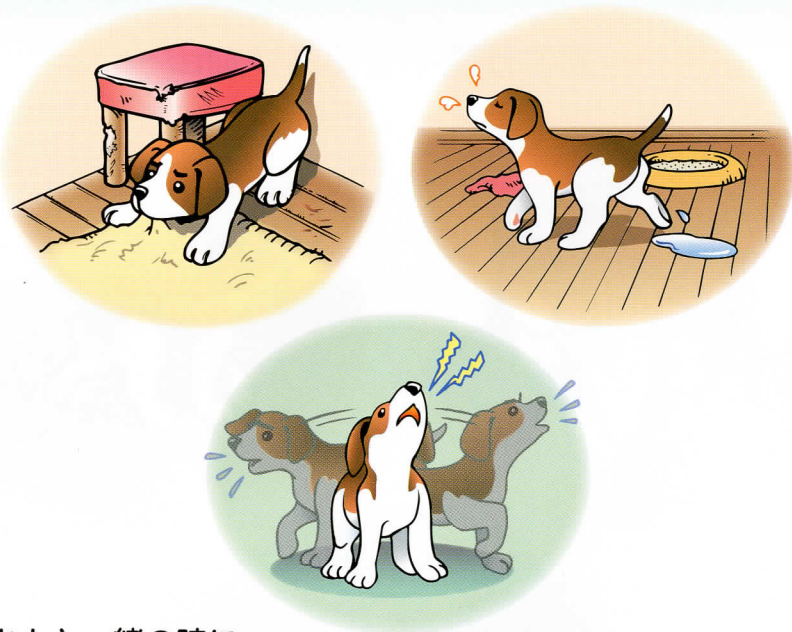
— 犬の分離不安のおはなし —



あなたのわんちゃん、こんな症状ありませんか？

あなたが留守の時に…

- 戸、床、家具などを噛んだり引っかいたりする
- トイレ以外の場所で、排尿・排便する
- 過剰に吠える



あなたと一緒にいる時に…

- つきまとい、何とか関心を引こうとする
- あなたが外出の準備をすると、そわそわ落ち着かなくなる
- あなたの帰宅時に、過剰に喜んで出迎える

そのほか…

- 足の皮膚が赤くなるほど過剰に舐めて、皮膚炎を起こしている
- 食欲不振、嘔吐、下痢をしている
- よだれを垂らしている

もしかしたら、『分離不安』で苦しんでいるかもしれません

もし左ページのような症状が多くみられたら、あなたのわんちゃんが、ひとりきりでいることの不安に苦しんでいる、『分離不安』という病気の可能性があります。

分離不安とは？

病気といっても、本来は群れで生活する犬にとっては自然な反応で、飼い主さんと離れることで、過度の不安やストレスを感じることによるパニックが引き起こす行動です。決して飼い主さんに対する嫌がらせや仕返しではありませんが、飼い主さんにとっては「問題」と感じられる行動となります。

分離不安は治療により治すことができる病気です。また、分離不安の犬は、ひとりになると非常にストレスを感じるため、適切な治療でわんちゃんの苦痛を取り除いてあげる必要があります。

主にどんな症状？

戸、床、家具などを噛んだり引っかいたりする破壊行動や、トイレ以外の場所で、不適切な排尿・排便する、また、過剰に吠える、などの問題行動がみられます。そして、これらは特に飼い主さんが留守のときに起こります。

どんな犬が発症しやすい？

性別、犬種には関係なく、飼い主さんに強く依存しているような犬に分離不安がみられると考えられています。5～21%の犬が分離不安で苦しんでいるという報告*もあります。若ければ若いほど、症状が悪化する可能性が高いといわれますが、高齢の犬でも発症することがあります。**

* : Horwitz DF. J Am Anim Hosp Assoc 2000; 36: 107-109

** : Chapman BL, Voith VL. J Am Vet Med Assos 1990; 196(6): 944-946

分離不安の治療

有効な治療法が確立されています

分離不安は治療可能です。犬がひとりになっても不安やストレスを感じないようにすれば、分離不安の症状は治まりますが、そのためには、犬を精神的に自立させる必要があります。母犬がある時期から仔犬と距離をおくのと同じことです。

行動療法と薬物療法

最も有効な治療法として、ご自宅で行う「行動療法」と、それをより早く、効果的にするために、分離不安治療補助薬として有効性が認められているお薬による「薬物療法」を併用することが薦められています。お薬は獣医師により処方されますので、かかりつけの先生にご相談ください。



行動療法とは？

あなたへの過度の依存心を軽減し、犬の不安やストレスを減少させるために行い、犬を精神的に自立させるためのものです。まずは、犬がひとりである時間になれさせていき、徐々にその時間を長くしていきます。

【普段一緒にいる時は…】

- 犬のほうから遊ぼうなどと身体的接触をもとうとしてきてもすぐに従わない（犬と遊んだり、触れたり、餌をあげたりなどは、犬に催促されてからするのではなく、すべて飼い主さんが主導で、飼い主さんの意思で行う）。
- お家にいて外出しない場合でも、鍵や鞆を持ったりコートを着たりして、外出するふりをする（外出時の一連の動作に慣れさせる）。

【外出する時には…】

- 外出する約30分前から、犬に注意を向けないようにする、または無視する（たとえば、犬と遊んだり、犬に触れたり、餌をあげたり、話しかけたり、犬を見たりしないようにする）。
- 外出する際に、犬の熱中できるものや注意を引き付けておくもの（たとえば飼い主さんのにおいが染み込んだもの、犬のおもちゃ、噛むものなど）を残して、飼い主さんへ犬の注意を向けさせないようにする。
- これらのことを、初めは短時間の外出からならしていき、少しずつ外出の時間を延ばしていく。

【帰宅時には…】

- 犬の興奮が治まり静かになってくつろぐまで、犬と遊んだり、犬に触れたり、餌をあげたり、話しかけたりしないようにする。
- 犬が過剰に喜んで興奮していたり、犬のほうから遊ぼうなどと身体的接触をもとうとしてきても、一切関心を向けず落ち着くまで声をかけない。
- 外出中に犬が家の中で破壊行動をしたり、不適切な排尿・排便で汚れていても、決して犬を叱らない（犬は数秒以上経過した過去のことを叱られても理解はできず、かえって不安を増すため）。

薬物療法とは？

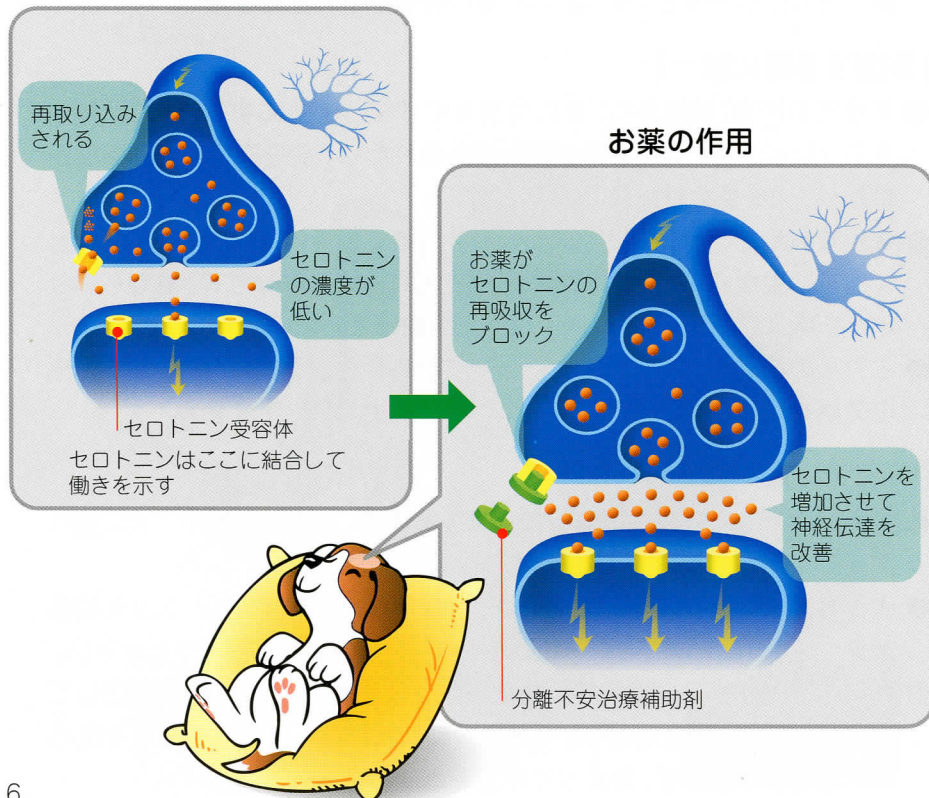
薬物療法は、分離不安治療補助剤というお薬を用いて、行動療法をより早く効果的にすることを目的として、あくまでも行動療法の補助として併用します。獣医師の先生にご相談ください。

お薬(分離不安治療補助剤)のはたらき

分離不安の犬では、脳内の神経伝達物質のひとつである「セロトニン」が減少し、その働きが弱くなっているために、症状が現われていると考えられています。

そのため、分離不安治療補助剤というお薬は、このセロトニンを増加させてその働きを強め、犬の不安を軽減する作用があります。

分離不安のわんちゃん



併用療法の有効性

「行動療法」と「薬物療法」を同時に行うことにより、より効果的に治療を行うことができます。

分離不安の各主症状に対する改善率

